

ありがとうの花を

栃木市立栃木西中学校

一年

新村

成奈子

女

「今日はカレシだぞ。」

母の実家に遊びに行くとき祖父手作りの食事を

を楽しみにしている。祖父は世話好きでじ

っとしているのが苦手だ。以前、構入した冷

蔵庫が届いたとき、配達の人だけでは重いだ

らうと手伝おうとした祖父に

「かえって足手まといになるから。」

と、祖母が注意するくらいだ。

「人に喜んでもらうのが好きだからね。」

と、あきれながら祖母は笑っている。

そんな祖父が、ある日体調を崩した。幸い

入院せずにすんだが、日に日に足腰が弱くな

って、自分の事をするのも精一杯になってし

まい。外出時は補助が必要になった。母は毎

日のように実家へ行くようになった。私は祖

父が気になり、時々遊びに行くようになった。

すると、

「成奈子ちゃん、いつもお母さんをとって
めんね。」

と、すっかりやりやせてしまっただ祖父が謝った。

「そんなこと気にしなくていいよ。今までじ

いじはいっけいお世話してくれただんだから。」

と、言いたかったが、泣きそうになっ

「全然平気。それより元気になっ

と、精一杯の笑顔で答えた。それから学校の

話をたくさんすると、祖父はニッコリしながら

ら私の話を聞いてくれた。帰る時には、

「来てくれてありがとう。」

と言ってくれた。

早く元気になっ

三月に転倒してしまいい入院することになった。

病院でもあいかわらず看護師さんに何かして

もらうと必ず「ありがとう」の言葉を言っ

いる。痛くて辛いけすなの

に感謝の気持ち
を
忘れない祖父は、すごいと思っ

た。
四月に祖父は八十七年間の人生を卒業した。

お渡れ様。私をかわいがっ

うと心を込めてお礼を言った。祖父と一緒に働いていた人達や絵画教室のメンバー、昔サツカーを教えていた生徒たちもお別れに来てくれた。会場は大勢の人たちで、入りきれないくらい集まってきた。これが、人が喜ぶことの大好きだった祖父がまいた思いやりの種だと思つくと、涙があふれてきた。

そして不思議なことが起こった。お葬式が終わつても一人も帰らないのだ。みんな手に花を持って、ひつぎに花をそえながら、

祖父に「ありがとう」と話しかけ始めたのだ。「じいじ、じいじがまいた種の花が咲いたんだね。」
「これがある、この花なんだね。」
「思ったから、涙が止まらなくなった。私はみんなへの感謝の気持ちでいっぱいになった。会場いっぱい「ありがとう」があふれ、ありがとうの花でいっぱいになった。気がした。「よかったね。じいじ。げあばのことは心配しないで大丈夫だよ。これから私は私に、あはを守るからね。」